昇華の動因論

堀川　聡司

本稿は、精神分析固有の概念である昇華について、その理論的側面の精緻化を目指す一つの試みである。

西洋哲学における「崇高」や錬金術における「昇華」に起源があるとされるこの言葉は、Freud, S. によって精神分析の専門用語となった。それは、性欲動が抑圧されることも神経症症状を作ることもなく、非性的な対象へと導かれ、社会・文化的に価値あるとされるものへ転換されることを意味する。つまり昇華とは、個人の内的な心的プロセスと、社会・文化といった個人の外的な環境とをつなぐものとして位置づけられるのである。日々臨床に携わる私たちは、クライエント／患者の内的な心の世界に最大の関心を払う一方で、その人が社会・文化の中でどのように生きていくかも常に念頭に置いておかねばならない立場にいる。それゆえ、このような個人の内面と外界とを橋渡しする概念にひときわ惹きつけられてしまうのである。

しかしながら昇華の概念は曖昧な点が多く、Freud 自身まとまった論考を書くことがなかった上、後世の分析家は、Freud が想定していなかった範疇にまでその意味合いを広げた。それゆえ、現在に至るまで昇華理論の実態は把握し難い状況となっており、それぞれの分析家が様々な現象や臨床経験をこの語で表現し、その文脈に応じた理論的な考察を行っている。そのような事態に着眼し、筆者は以前、Freud、Klein, M. および自我心理学における昇華理論の変遷（1905～1955 年）についてレビューした[9]。

今後、単なる語法の整理に留まらない、今日的にも意義のある一貫した概念として昇華理論を提示することを目指すならば、どのような作業が必要であろうか。筆者はそれを端的に、以下の二つの点を明確にすることであると考えている。

［1］昇華をひきおこす心的メカニズムとはどのようなものか。
［2］何をもって、ある事態を昇華と名指すことができるのか。

この二つの課題設定は、Laplanche, J.[16]が掲げた昇華理論の二側面に由来している。彼は昇華概念を扱うためには、「メタサイコロジー」と「価値論」を俎上に載せねばならないと述べている（p. 20）。40 年近い歳月を経た現在も同様に、この二つを厳密に捉えていく必要性があると考えられる。

第一の課題についてみてゆこう。Freud における欲動とは、有機体の内部からやってくる刺激のことであるが、その最も基本的な目標は「緊張を解放すること」あるいは「緊張を一定の

水準に保つこと」である。しかし、昇華と呼ばれる欲動の運命はそうした性質からは大きく隔たっている。昇華において欲動は、性的な満足の代わりとなる満足を得るべく、社会・文化的に受け入れられる形態へと変容され象徴化される。これはFreudがしばしば言及する「欲動の可塑性」ゆえの結果に他ならないのであるが、欲動がそのような運命を辿ることになるのは何故なのか。いいかえれば、欲動を昇華といわれる状態へと変換するその要因は何なのか。昇華における欲動の状態、あるいは欲動が辿る道筋についてはメタサイコロジカルな記述が十分に可能だが、その動因に関わる問題は非常に不明瞭である。

第二の価値論に関わる課題は、歴史的にみても極めて複雑である。Freud は昇華を主に知的活動や芸術活動に限定していたため、彼にとってそれは限られた天才だけが為せる所業であった。ところが、後世の分析家のほとんどは、昇華を人間全般に遍くみられるものとして捉えるようになっていった。例えば、Klein[10]は子どもが言葉を話すことも昇華の結果であるとしている(p. 104)。つまり、論者によって昇華という現象が指し示す範疇は異なるのである。また同じ現象や芸術作品についても、その価値のありようは時代的・地域的な背景に左右されざるをえない。今日名作といわれるような芸術作品も、その作者の存命中は見向きもされなかったということはしばしば耳にする話である。また、「偽成熟」のケース、すなわち内面の成長は全く不十分だが、一見すると適応的で高い評価を受けているような場合を、昇華されているとみなすかどうかも議論を要する問題である。こうした価値判断に関わる点をはっきりと定義づけることは、昇華理論の精緻化にとって避けることができない事柄である。

筆者は本稿において、上記の二つのうち前者の課題に焦点をあて、「昇華の動因論」を探究してゆきたい。その際の導きの糸として、Freud に限定されない複数の分析家の思索を参照することになるが、昇華の動因的な側面について言及した研究はごく限られている上、一応の答えを明示したのは、筆者の知る限り自我心理学を除いてほとんどいないといってよい。自我心理学では、自律的な審級である自我が欲動を操作すると考えたため、昇華も自我によって扱われるとみなしたわけであるが、そこにおいても一筋縄では解決されない問題を孕んでいる。本稿では、昇華に言及した複数の分析家に注目し、彼らの思考を辿る作業を通して昇華の動因が何であるかを多面的に捉える試みをしてゆきたい。各々の分析家たちにとって昇華の問題は、彼らの主要たる理論体系の一要素として組み込まれているものも少なくないゆえ、こういった作業は私たちに実りある視座を与えてくれるだろう。

なお、第二の課題、すなわち昇華の価値論、価値判断に関する問いは、本稿では詳しく考察することができないため、別の機会に譲られる。

１．防衛と適応―自我心理学における昇華

まず、昇華の動因について、自我の存在を殊更に強調した自我心理学の議論をみてゆき、その理論的な限界も浮き彫りにしてゆこう。

後期Freudの第二局所論を引き継いだ自我心理学は、その理論的基盤にある種の自律性を持ち、独立した主体性を有する自我の機能を想定しており、その自我は短絡的な満足や欲求を断念し、制限し、延期させる機能をもつ。さらに自我は、現実の要請に従いつつも欲動をある形

に置き換えたり、一時的に解放することも可能にする。自我心理学の考える昇華とはまさしく、こうした自我がもたらす産物に他ならないのである。

Freud, A.は、後に自我心理学の教科書的な存在ともなる『自我と防衛』の中で、自我が内なる欲動や外界の危険から身を守るために用いる十の防衛機制の型を提示し、体系化した[2)]。昇華とはその十番目にあたるもので、主に健常者が使用することのできる防衛機制である。

戦後アメリカにおける精神分析興隆の立役者であったHartmann, H.は、自我機能の範疇をさらに拡大させ、適応論の観点を導入した。Freud は後期に提出した第二局所論において、自我はエスから分化されて生じるものであると想定したが、Hartmannは自我の中には葛藤や不安に影響されることなく自律的に働く健康な領域、すなわち葛藤外領域が、先天的・生得的に備わっていると主張した[8)]。適応をつかさどる機能は人間に遍く存在している上、自我の葛藤外領域に属しているため、葛藤や不安の影響をあまり受けない独自のシステムを維持していると捉えたことが、彼の発想の新しい点であった。

Hartmannは昇華を、自我によってなされる一つの機制として捉えるだけに留まらず、適応を充溢なものにするために不可欠なものともみなした。彼によれば、適応の実現のためには、性的なエネルギーと攻撃性のエネルギーが本能的なものから非本能的なものへと変容される必要がある。こうして脱本能化されたエネルギーは、昇華されたエネルギーあるいは中和されたエネルギーと呼ばれるが、自我はその後、このエネルギーを様々な心的過程に対して配分し、より優れた適応を目指してゆくのである[7)]。

以上のように、自我心理学において昇華とは、防衛や適応といった人間が生きてゆくために必要な要請に応えるために、自我が能動的に実行する一つの操作といえる。こうした理解は明快かつ合理的であり、体系化された説明のようにみえるが、筆者が先に立てた［1］の問いの全てに答えることはできない。なぜならば、動作主としての自我の自律性を措定するだけでは、どのようにして欲動が昇華への道を辿るようになるかは明確にされないままだからである。昇華とは社会・文化的な価値観と深い関わりをもつものであるが、人間が生まれながらにして既に自分の生きている環境の性質や価値観などを把握しているとは考え難い。自我心理学の中には、人は遺伝的本能を持って生まれてくるので、世界に直面した時、それを知覚したり新たな発見をする必要はなく、思い出し、再認するだけでよい、とする考え方が存在する。しかしながら、時代や文化といった現実的な側面に大いに影響を受けている昇華を語るためには、外的世界との関わり、あるいは外界を取り込む機制といったものの想定は避けて通れないのではないだろうか。

これについては、自我心理学の「自律した自我が生来的に人間の中に存在している」という前提にしばしば向けられる他学派の批判が有益な考察の材料となるだろう。なるほどHartmannはそのような自律的な自我が最初から存在していることを根拠を示して力説しているが、このような考え方は、Lacan, J.を筆頭に多くの精神分析家が想定した「他者によって自らが規定される」、あるいは「他者との相互関係によって初めて自らが形成される」といった発想とは大きく対立する。ある意味非常にニヒリスティックなこの人間の捉え方は多くの精神分析的理解に通底しているものであり、外部の価値観が影響してくる昇華理論を考える際にも欠かすことの

できない視点といえるだろう。

２．ナルシシズム的自我と自我理想―Nasio, J. D.の読解

それでは昇華が実現されるにあたって、社会・文化的な文脈はどのように取り入れられるのだろうか。この問いに答えるために、Freud が思索したメタサイコロジーを、後期の局所論が提出される以前の議論に遡って読みなおすことは決して無意味な作業ではないだろう。筆者はここで、Freud のテクストと徹底的に向かい合った Nasio の緻密な読解[17]を参照したい。彼は昇華の過程に必要な条件として、「昇華の成立には、ナルシシズム的自我の仲介が必要である（邦訳 p. 127）」、そして「自我理想が昇華の動きを制約し方向づける（邦訳 p. 128）」という二つの命題を提示している。

（1）ナルシシズム的自我の仲介

Nasio はまず、昇華の過程において必ず記述される「脱性化」という表現に注目する。彼は「リビドーが昇華されても、それが最初からもつ性的な性質は決して失われない（邦訳 p. 127）」と述べるが、これはその過程において、欲動そのものが完全に脱性化されるわけでなく、ただ欲動の対象が性的な性質を帯びないものへと向けられるという意味なのである。そしてそういった脱性化が行なわれる方向転換のためには、重要な仲介的な操作、すなわち性的対象からリビドーを撤退させて己自身に向けかえ、最終的にそれを非性的な方向へと導く操作が必要である。これは Freud[6]が後期に述べた昇華の過程そのものであるが（p. 30）、このような操作によって、欲動が本来目指していた性的満足という目標は、昇華された満足（例えば芸術的な満足）に席を譲ることになる。

この操作の担い手は自我であるが、ナルシシズム的自己満足という仲介的な快感を通して成し遂げられることを Nasio は指摘する。ゆえにその人のもつ「ナルシシズムこそが、昇華された欲動による創造活動の条件であり、昇華を促進するものなのである（邦訳 p. 127）」。ここで、ナルシシズムという語の意味合いに注意せねばならないだろう。Freud がリビドー経済論において使うこの用語は「リビドーが自我へと撤収された状態」という意味である[5]（つまり今日的な語法としての「自己愛」とは本質的に関係がない）。それゆえ、前節の議論にひきつけて要約するならば、リビドーを昇華させて満足するのは自我であるが、その自我とは対象からリビドーが撤収してきたことに由来する心的審級なのである。

（2）自我理想の方向づけ

このように、昇華の仲介役としてナルシシズム的自我が関与するのだが、欲動が非性的でかつ価値あるとされるものへ移行されるには、昇華の性質上、その時代の象徴的理想および社会的価値の支えが不可欠である。つまり主体の外の世界に存在している価値観が主体の内面に位置づけられている必要がある。その過程はまさしく「ナルシシズムの導入にむけて」や『集団心理学と自我分析』の中で展開されたものであり、中後期 Freud のメタサイコロジー論を彩る主要な発想である。それはある種の社会的理想が、主体の中に取り込まれるようになり、その後、自我理想（あるいは超自我）という心的な審級を形成するという力動論である。Nasio は

自我理想が昇華の過程において次のような二つの役割を果たすと指摘している。

第一のものは、「昇華過程を始動させる起動装置の役割(邦訳 p. 129)」である。昇華の動きが始まると、最初のうちは自我理想が作品創造への気持ちを誘発するが、やがてこの創造的情熱が次第に自我理想から離れ自立してゆく。Nasio は「症例ハンス」において、ハンスが音楽に傾倒していった様を引き合いに出しながらこのことを説明している。ハンスの場合は父親が求めてきた音楽が自我理想となっており、次第に音への純粋な愛が芽生え、最終的には理想的なものを基準とし、あらゆる規範や抽象的価値を求める気持ちが創造活動の素材と結びつき溶け合っていったのである。

自我理想の第二の役割は、自我理想は昇華の動きに一定の制約を加え、方向づけを与えることである(邦訳 p. 129)。自我理想の存在によって、欲動の矛先は性的満足ではない非性的満足へと逸らされ、そのような方向へ進むことが促される。

Nasio の鋭さは、Freud が触れている昇華と抑圧の関係について、その真意を的確に読解しているところである。それによって昇華と自我理想との関係がより明瞭となる。Freud[5)]は「これ（理想形成）に対して、昇華は、抑圧を介入させることなしにこの要求が成就されうる逃げ道となるのである(p. 95)」と述べているが、Nasio の読みによるとこれは、欲動の力が抑圧を解かれ一切の拘束からすっかり自由になる、という意味ではない。この一文はむしろ、昇華の過程において一定の制約を加えているのは、抑圧のような禁圧による検閲の働きによってではなく、自我理想の働きによるものである、という意味で取られねばならない。自我理想こそが、欲動の可塑的な能力を高め、そこに枠組みを与えるのである。

Nasio はとりたてて強調はせず、多少触れているに過ぎないが、自我理想とは昇華が展開するにつれ、うち捨てられるべき存在ともいえるだろう。上述したとおり、自我理想は昇華の過程の始動点であり、方向づけを行うものだが、昇華の結果はその理想とは異なる場合もある。それどころか、昇華は理想を諦めてゆく過程といってもよいかもしれない。先に引用した Freud の言葉の直前には、「理想形成は、すでにみたように、自我の諸要素を強め、抑圧の最も強力な援護となる(p. 95)」という一文があるが、ここから読み取れることは、もし理想に固執するのであればそれは逆に抑圧の力を強めてしまい、昇華の道が閉ざされてしまう可能性があるということである[1]。この点に関連して、Lagache, D. [14)]も精神分析実践を語る文脈で、「それゆえ、自律的な経験によってのみ、精神分析の価値論的な備給(l'investissement axiologique)が理想から昇華へと変容するのだろう(p. 204)」と述べている。これらが示唆しているのは要するに、昇華は理想を起点としながらもそこから離れていく過程が必要である、ということに他ならない。

---

[1] Freud における昇華と抑圧の関係に関しては、他にも複雑な問題が孕んでいる。彼はダ・ヴィンチについて考察した論考[4)]の中で、ダ・ヴィンチの性的快の追求は抑圧によって押さえられ、結果としてリビドーの大部分が知識欲へと昇華された、という旨を述べている(p. 81)。したがって少なくとも 1910 年当時の Freud にとって、抑圧とは昇華を助長する側面もあることになり、先述の見解とは相反することになる。

３．根源的欠如―Klein の償いと Laplanche の依托論

（１）償い

昇華に関わる Freud の言及から、以上みてきたように、自我理想がその成立と方向づけに大きく関与していることが理解されたが、これとは別に Klein は昇華の方向づけについて償い・修復(reparation)が重要な役割を果たすことを指摘した。その言及は、抑うつポジションの概念が提出された中期の論考[12]においても既にみられるが、より明確に提示されたのは以下の一節においてである。

> この段階（抑うつポジション）で大きな役割を演じる償おうとする欲動は、心的現実に対するより優れた洞察と進展した統合の結果とみなすことができる。というのも、この欲動が示しているのは、愛すべき対象に向かう攻撃性のために生じた悲嘆、罪悪感、喪失の恐怖といった感情に対するより現実的な反応であるからだ。傷ついた対象を償い、保護しようとする欲動は、より充溢した対象関係と昇華への道を開くものであり、次第に統合性を高め、自我の統合に寄与するのである[13]。(pp. 14-15、括弧内は引用者捕捉)

Klein は乳児のもつ原初的な心の世界を探究する中で、対象が分裂しており、迫害不安や具体水準の思考が優位な妄想分裂ポジションから、対象を全体的なものとして認識し、自我もより統合されるようになる抑うつポジションへと移行する様を描き出した。償いとは、抑うつポジションにおいて、乳児が母親を破壊してしまったという感情やその罪悪感に直面し、その絶望から母親を外的にも内的にも復活させようとする心的機制である。母親に関わる内外の対象が空想上で償われることによって、自我も統合され、より安定した対象関係を築けるようになるのだが、彼女はこの原初的な償いがなされることが後に昇華の成立条件になると考えたわけである。

理論的な精緻化はみられないが、Klein が初めて償いと昇華とを関連づけて考えたのは、ルース・クヤールという画家の症例を参照した際においてである[11]。その症例では、筆を一度も握ったことのないメランコリー女性が、重い抑うつ状態に陥った時に、黒人裸像の壁画を芸術的に描いたことによって抑うつが改善し、以後閨秀画家として多くの作品を手がけるようになったという経過が示されている。Klein はその論文の中で、エディプス・コンプレックスの早期段階で生まれるサディスティックな欲望が、次第に愛の対象を喪失する恐怖となり、最終的に傷つけてしまった母親を償い、自分自身をも立て直そうとする欲望へと変容していく過程を説明している(p. 218)。つまりこの女性の描画活動とは、彼女自身が抑うつポジションにおいて果たそうとした償いの行為なのである。後に Klein はこれを昇華であると述べ、原初的な償いと昇華の連続性を主張した。

養育者の世話が一時的にせよ欠落することは避けがたいことであり、この喪失は乳児が必然的に体験せねばならないものである。それゆえ生まれながらにして生の本能と死の本能がうごめいている乳児は、母親の不在およびそこから生じる不快な感覚によって、死の本能を活性化させてしまう。しかし、乳児はそれまで悪い対象だと思っていたものとよい対象だと思っていたものが同一であると洞察し感知することを通して、このような段階から抑うつポジションへ

と移行する。そこに至り乳児は、もはや分裂していない自己のもつ攻撃性を悔い、罪責感を抱くようになる。そしてさらには，よい対象に対する寂しさ、思い焦がれ、切なさ、悲哀といった様々な抑うつ的な情緒を発展させてゆく。償いの願望がわき出るのはこのような時である。

（2）欲動の依托論

Klein の視点によればこのように、昇華の動因は償いであり、さらにその起源へと遡れば、乳房の不在、乳房の喪失といった人間が遍く被ることになる欠如が密接に関与している。Laplanche もまた、昇華をあらゆる人間に課された欠如と関連づけて考えた[16]が、彼の理解は Freud の当初の欲動論から厳密に出発しており、より生物学的な視点が濃厚である。

彼はまず、Freud が『性理論三篇』[3]にて提示した依托（寄りかかり）のメカニズム（pp. 182-183）に注目し、餓えや睡眠欲求といった自己保存欲動から、次第に生物学的な欲求とは異なる性欲動が発達してゆく点を強調する。例えば、乳児にとって母親の乳房から母乳を得ることは当初、生き延びてゆくために欠かせない食物摂取でしかない。しかしその際、唇や口内粘膜、食道などが心地よい体験をすることによって、次第にその身体部位が独立した性源域となり、最終的には自己保存欲動とは無関係な欲動の場として機能するようになる。つまり人間にとっての性とは、養育者と関わることに由来しており、そのような意味で、性とは他者から到来するものといえるのである。Laplanche はこのような性の獲得を、人間が否応なしに被る外傷的な体験であると主張した。性欲動が依托によって非性的な自己保存欲動から分離する際、元々一つの平面であったものが二つに分かれることになるのだが、それはあたかも牡蠣の殻を開けるためにナイフを差し込むようなことであり、ある種の損傷、喪失が外傷的に刻み込まれてしまう。性欲動は以後、自己保存欲動とは独立して様々な運動をするのであるが、Laplanche はこの性の平面での活動は再び自己保存の平面へと回帰することもあると言う。これは Freud が『性理論三篇』[3]の「相互影響の通路」という項目で論じている内容（pp. 205-206）に準拠しているのだが、Laplanche は非性的な性質を有する昇華を、性欲動によってなされる失われた自己保存平面の取り返し運動とみなせる可能性を示唆している。

Laplanche は結局、昇華のメタサイコロジーについて完成された理論体系を構築するには至らなかったが、昇華の起源を Klein 同様、乳児期の体験にまで遡って示そうとした。二人のこのような着想は、「昇華は超自我が成立して初めて可能になるものである（邦訳 p. 65）」と断言している Freud, A.[2]に対して新たな光を投げかけるものといえる。というのも、発達史的な視点からみれば、Klein のいう償いや Laplanche の着眼した欲動の依托は、超自我が形成されるエディプス期よりも遙かに遡る時期においてなされるからである。もちろん、昇華そのものがエディプス期以前に生じるということを Klein や Laplanche は明言していないが、プレエディパルな水準においても昇華の萌芽が存在していることを指摘した点では少なくとも新しい言説といえるだろう。

4．象徴産出的去勢―Dolto，F における昇華

昇華の機制とは自我が動作主となって作動するものであるが、それに先だって外界との関わり、あるいは外界からの作用によって、その準備がなされている。Klein や Laplanche の見解

からは、特に養育者との関係が大きな影響を与えていることが示されていた。Dolto もまた、養育者が子どもの昇華に関与することを見抜いた分析家である。彼女はその成り立ちを自身の主要理論の一つである「象徴産出的去勢」を説明する中で詳細に体系づけている[1)]。まずは彼女が考えた去勢について概観した上で、昇華がどのように成立するかをみてゆこう。

（1）象徴産出的去勢

Freud は、解剖学的なペニスの有無に直面した幼児が抱く「去勢コンプレックス」という空想を概念化した。去勢コンプレックスの概念は、精神分析の発展に大きく寄与したが、とりわけ Lacan が展開した去勢概念の刷新は大々的なものであった。Freud の図式は「子どもが去勢の脅しをうけ、母親を諦める」といったものであったが、Lacan は「母親が子どもをファルス（自らの欠如を埋める存在）とみなすことを断念すること」も象徴的な意味で去勢である、とみなしたのである[15)]。これは父性機能によって果たされるものであるが、この象徴的な去勢によって、子どもは正常な性関係を結ぶことができるようになる。

晩年に袂を分かつまで常に Lacan と共に歩んだ Dolto も同様に、去勢がもたらす肯定的な側面に注目した。彼女による去勢の定義とは、自分の望む形で欲望を満たすことが他者から「掟」によって禁じられていること知り、それを受け入れていく心的な過程である。ここでいう「掟」とは、単に禁圧を行うためのものだけではない。子どもの成長を「掟」に基づいて支えることのできる年長者が適切に去勢を行使した場合、子どもは社会共同体内での主体的行動を高め、文化的活動を促進させることができる。つまり「掟」には、子どもを世界に生きる人間として成長させる側面もあるのである。メタサイコロジー的に記述すれば、去勢とは、一次的に欲動を満足させていた「短絡路(circuit court)」を断ち切り、結果として「迂回路(circuit long)」の経由を強いるものである。欲動が迂回路を通って満足を得ることは、元々の満足の目標が象徴的に置き換えられたことを意味する。それゆえ Dolto は、去勢には象徴性を産む側面、つまり象徴産出的な(symboliquegène)側面があるとし(p.78)、このような経路で象徴的な目標を達成することは昇華に他ならないと述べた(p.80)。

（2）去勢がもたらす昇華

Dolto は以上のように、禁止を促す去勢が他者から執行されることによって、昇華への道が開かれることを見出した。但し、子どもにもたらされる去勢は、各々の発達段階に固有のものがあり、そこから得られる昇華の種類もまた複数存在する。それらは発達順に、臍帯去勢、口唇期去勢、肛門期去勢、一次去勢（非エディプス期の性器的去勢）、エディプス期去勢と名づけられており、各段階において適切な時期に適切な去勢がなされることで、その段階固有の昇華が果たされ、子どもは正常な発達を遂げることになる。

例えば、口唇期においては、口唇が母親の乳房から得られる性的快を享受する身体部位として機能している。それが去勢、すなわちいわゆる離乳を迎えると、母親に向ける食人的心性が剥奪され、母親という存在を食物という部分対象としてではなく、一人の人間存在として全体的に把握できるようになる。また母乳にとって代わり、多様な食文化へと誘われることになる。そこには当然「食べられないものは口にしてはならぬ」という禁止が含まれており、さらには

人間社会が持つ食の秩序に参入するということも含意されている。そしてこうした母親との直接的な身体接触というコミュニケーションから分離されることで、子どもが言語活動(langage)を獲得する機会を得ることになる。これによって子どもは母親に理解してもらえるようになるだけでなく、母親だけに依存しなくてもよくなるのである。

しかしながら、去勢が執行されれば必ず昇華がもたらされるというわけではない。去勢によってもたらされる欲動の象徴化が、倒錯[2]や神経症性の抑圧を生じさせるということもある。Dolto はこのように、人の様々な病理や病因を各段階においてなされるべき去勢の不適切さに見出したのである。それゆえ治療のためには、どの段階での去勢が不十分であったかをしっかりと見立てた上で、臨床場面において治療者がふさわしいタイミングで去勢を執行し、昇華をもたらす介入を試みなくてはならない。

５．昇華と二次過程

ここまで「昇華をひきおこす心的メカニズムとはどのようなものか」という問いに答えるべく、複数の分析家の昇華理論を取り上げてきたが、それらの議論のまとめを「昇華の動因に関わる４つの命題」という形でここに提示したい。

①欲動を昇華に導く動作主は自我である

但し、ここでいう自我とは、自律的に一部始終を完全管理している心的審級というよりも、リビドーが撤収したことによってできあがった「ナルシシズム的自我」と捉える方がより適切である。

②自我理想が昇華の始動点となり、昇華の方向づけを行なう

最初の象徴的始動点となる自我理想が内的にもたらされることによって、昇華のきっかけが与えられる。さらに欲動の可塑的な性質を高め、昇華の進む道を方向づける。

③償いが昇華の雛形となる

Klein の理論に基づくもので、原初的な喪失に対する償いの作業をすることが後の昇華の条件となる。また、そのような欠如は養育者である母親の不在、あるいはよい乳房の不在に由来するものであるため、人間が避けがたく被らなくてはならない運命にある。類似することとして Laplanche は、性欲動が自己保存欲動から分化する際に生じる外傷的な喪失が欠如として刻み込まれていることを主張し、それが昇華の基盤にあるとした。

④去勢によって昇華が果たされる

Dolto の理論に基づく命題である。象徴産出的去勢によって昇華がもたらされるための条件としては、禁止の「掟」を与える養育者、年長者が子どものことを思っていること、さらには

[2] Dolto が述べる倒錯とは、古典的な意味での性的な倒錯のみならず、正常な人間的成長が果たされていない場合を広く指す。

自身もその「掟」に従っていることが不可欠である。

以上が本稿において筆者が挙げることのできる、昇華をひきおこす動因についての４つ命題である。これらが今後、昇華のメタサイコロジー探究や昇華研究に大きな益をもたらすことが期待される。だがいうまでもなく、この４つで昇華のメタサイコロジーを語り尽くすことは不可能であるし、異なる文脈で述べられている議論から抽出した命題を並列できるかも断定が難しい。例えば、③と④の命題を同時に適用するならば、主体が償いをした上で他者から去勢されることが昇華の条件になるが、これはKleinやDoltoが想定した範囲外のことであろう（とはいうものの、昇華とは欠如を被ることを余儀なくされた主体が人間的に生きてゆく上で、必ず通過せねばならない心的過程であるとみなしている点では二人の考えは一致している）。しかしながら、いずれもFreudに端を発して論を展開させてきた分析家たちの見解であるゆえ、将来の昇華研究の叩き台としてその役割を発揮するだろう。

さて、ここまで昇華の動因論について考察してきたが、以上の命題に加えてもう一つの定式を与えてみたい。それは「昇華は欲動の二次過程である」という定式である。「昇華＝二次過程」と断定する言説は、筆者の知る限りほとんどみられないが、本稿のこれまでの議論を振り返ってみれば、それはいささか明瞭なことではないだろうか。

そもそもFreudがメタサイコロジー的に想定した昇華のプロセスとは、欲動の直裁的な満足を一旦諦め、迂回した形で満足を得るというものであった。これはまさしく心的二原理のうち現実原理のおいてなされることである。また、理想を捨てるということ、欠如を受け入れていくということ、妄想分裂ポジションから抑うつポジションへと移行すること、欲動の短絡路を断ち切り迂回路を経ること、これらはみな一次過程ではなく二次過程を選択していることを様々な表現でいいかえているに他ならない。

このように捉えると、昇華とは「主体が限られた手持ちの材料と与えられている環境において、存続可能な快の追求を目指す心のあり方」と定義づけることができるだろう。これは、昇華という語がもつ一般的なイメージ（例えば、芸術活動やスポーツで才能を華々しく開花させる、あるいは鬱積を発散させる、といったイメージ）とは大きく異なる定義といえるかもしれない。

昇華を二次過程とみなすこの定式は、本稿で取り上げた諸分析家の主張をまとめると同時に、価値論を論じるためにも、さらには臨床実践において治療を考える際にも有用と考えられる。本稿の締めくくりとして、今後の昇華研究において取り組まれねばならない問題の端緒を提示することにしよう。

まず、昇華の価値論を考えるためには、改めてFreudが思索した二次過程の性質を振り返らねばならない。一次過程における心的装置は、一度登録された記憶表象を再現することで満足を得ていたが、二次過程に至ると、この表象に対応する対象を外部に見出す努力をするようになる。そこで導入されるのが、現実原理である。それゆえ二次過程としての昇華は、定義からして現実原理が導入されており、そのプロセスの内部にはそもそも外界の価値の如何を取り入れる機制が存在しているのである。翻って考えてみるに、昇華は命題②で指摘したように、象

徴的理想や社会的価値が取り込まれることによって形成された自我理想によって方向づけられる。この自我理想とは、あくまでその主体にとっての理想であり、主体の「心的現実」として刻み込まれた理想なのである。それゆえ、自我理想によって導かれ獲得された成果が、時代の総意あるいは一般的な価値観（もしそのようなものがあるとすればだが）と一致していない可能性も十分にありうるわけである。そうなると当然、同じ行為や現象、制作物も、判定する他者によって昇華とみなせる場合もあればそうでない場合も生じてくる。昇華の価値論を語る際の難しさ、そしてその精緻化を進めてゆく際の糸口はここにあると考えられる。

次に、治療と昇華との関連についてだが、Freud 自身は「精神分析の目標は昇華である」などと明言することはしていない。だが、病因として想定される欲動が症状形成に使われず、社会的に受け入れられるあり方に変容することができるならば、それは一つの望ましい姿であり、治療の方針とみなせそうなものである。実際、Klein[10]はFreudと見解の相違がないことを殊更に強調していた初期の論文の中で、「原則として私たちの経験によると、精神分析とは専ら昇華を促進することである(p.91)」と述べており、症状を生まずに健常者のように昇華を実現させる方法を思案している。フランスの精神分析において昇華が語られることは現代のKlein派に比べ非常に多く、例えばLagacheが、精神分析実践を一種の昇華の過程とみなしてその困難さについて論じている[14]。そしてDoltoも精神分析的な治療の過程を、正常な昇華を生み出せる「象徴産出的去勢」を首尾良く実行することと捉えていた[1]。三人とも、昇華という語の意味合いをFreudよりも広く捉えているとはいえ、治療の方針の一つとして昇華という概念を援用していたことは間違いない。

今日の精神分析は、Freud の時代のように欲動を中心に病理を考えて、治療論を説くということはほどんどなくなった。しかしながら、昇華という概念を私たちが手にしていることが治療の方針を立てる上での大きな強みになると思われる。とりわけ、苦痛や葛藤を保持できずに排出ばかりし、即時的な快の追求に走ってしまうようなクライエント／患者、すなわち一次過程が優位な臨床群においては、如何にしてそれを内面で扱えるようになり、自分なりの生き方が見出せるようになるか、という視点が治療上重要になってくる。本稿の論調に即した言葉で表現すれば、如何にして彼らが昇華できるようになるかを考えてゆかねばならない。そのためには、理論面の精緻化に加え、臨床実践においてどのような働きかけによって二次過程を促すことができるかを探究してゆく必要がある。

二次過程と結びつく臨床技法に関する有意義な知見が見いだされる時、私たちの昇華研究は真の意味で実を結ぶことになるだろう。

文献

1) Dolto, F. (1984): L'image inconscient du corps. Seuil, Paris (Points 251)
2) Freud, A. (1936): Das Ich und Abwehrmechanismen. Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Frankfurt am Main. 外林大作訳(1958)：自我と防衛. 誠信書房, 東京
3) Freud, S. (1905): Three Essays on the Theory of Sexualty. In S.E.7. The Hogarth Press and the Institute of Psychoanalysis, London

4) Freud, S. (1910): Leonardo da Vinci and A Memory of his Childhood. In S.E.11. The Hogarth Press and the Institute of Psychoanalysis, London
5) Freud, S. (1914): On Narcissism: An Introduction. In S.E.14. The Hogarth Press and the Institute of Psychoanalysis, London
6) Freud, S. (1923): The Ego and the Es. In S.E.19. The Hogarth Press and the Institute of Psychoanalysis, London
7) Hartmann, H. (1955): Notes on the Theory of Sublimation. The Psychoanalytic Study of the Child 10, 9-29
8) Hartmann, H. (1958): Ego Psychology and the Problem of Adaptation. International Universities Press, New York.　霜田静志・篠崎忠男訳(1967)：自我の適応.　誠信書房, 東京
9) 堀川聡司(2011)：精神分析における昇華理論の変遷　フロイトから自我心理学へ.　京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要15, 144-156
10) Klein, M. (1923): Early Analysis. In Klein, M. (1975): Love, Guilt and Reparation and Other Works 1921-1945. The Free Press, New York
11) Klein, M. (1929): Infantile Anxiety-Situations Reflected in a Work of Art and in the Creative Impulse. In Klein, M. (1975): Love, Guilt and Reparation and Other Works 1921-1945. The Free Press, New York
12) Klein, M. (1935): A Contribution to the Psychogenesis of Manic-Depressive States. In Klein, M. (1975): Love, Guilt and Reparation and Other Works 1921-1945. The Free Press, New York
13) Klein, M. (1946): Notes on Some Schizoid Mechanisms. In Klein, M. (1975): Envy and Gratitude and Other Works 1946-1963. The Free Press, New York
14) Lagache, D. (1962-1964): La psychanalyse comme sublimation. In Lagache, D. (1984): De la fantasie à la sublimation. Presses Universaires de France, Paris
15) Lacan, J. (1956-57): Le séminaire livre IV, La relation d'objet. Seuil, Paris
16) Laplanche, J. (1980): Problématiques III, La sublimation. Presses Universaires de France, Paris
17) Nasio, J. D. (1988): Enseignement de 7 concepts cruciaux de la psychanalyse. Rivages, Paris. 榎本譲訳(1990)：精神分析　7つのキーワード. 新曜社, 東京

本稿の執筆にあたって、平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けた。

（日本学術振興会特別研究員　臨床心理実践学講座　博士後期課程1回生）
（受稿2012年9月3日、改稿2012年10月31日、受理2012年12月27日）

On the Development of Sublimation

HORIKAWA Satoshi

This article aims to elaborate the psychoanalytic concept of sublimation. Sublimation is a vague concept, especially in relation to its meta-psychological development and value. This paper considers the psychological mechanisms that allow for sublimation. Concepts derived from ego psychology are used to explore this topic, but the understanding they provide is limited. The works of Sigmund Freud, Juan-David Nasio, Melanie Klein, Jean Laplanche, and Françoise Dolto are then considered. From this research, four theses on the development of sublimation are presented: 1) the Ego is the agent that sublimates drives, 2) the Ego Ideal is the starting point of sublimation and gives its direction, 3) reparation becomes a model of sublimation, 4) sublimation is driven by the castration under the law of prohibitions. In addition to these four theses, it is proposed that sublimation is a secondary process phenomenon. This formulation should be useful both for a theory of the value of sublimation and for clinical techniques that aim to promote clients' use of secondary process thinking. It is suggested that further research is needed on sublimation to arrive at better clinical practice.